



2020年3月の石巻  
(阿部一さん撮影)

# 東北ヘルプ ニュースレター

2020年イースター号

- 巻頭言 1 頁
- 南三陸に「恋人岬」を  
佐藤良夫さんインタビュー 2～6 頁
- 被災地・南三陸町で支援を展開すること 7～11 頁
- 良いことは、かたつむりの速さで  
インタビュー：岩沼での放射能減災の取り組み 12～13 頁
- 「いわき食品放射能計測所 いのり」の新しい体制  
「TEAM ママベク」インタビュー 14～21 頁
- 会計報告 22 頁

## 巻頭言

### 1.

COVID19と名付けられたウィルスの感染症が猛威を振るっています。それに加えて、それに伴って展開する政治・行政・マスコミそして世間の動きに、振り回される私たちがいます。

本当に多くの方々が、私たちの周りで、「あの時」を思い出しています。物流が滞って「物不足」となったこと。「情報」が過剰に行き巡り身動きが取れない思いをさせられたこと。「子ども」たちへの対応がどこまでも貧弱であったこと。いつも「情報開示」に不足を感じさせられ続けたこと。そして、私たちの「いのち」の儚さと、その裏腹にある、「日常」の貴重さ。

私たちは、津波の被災地で、そして原子力災害の被災地で、これらと向き合いました。その恐怖を、今でもありありと思い出することができます。そして、それを今、初めて骨身に感じるようになった多くの人々の混乱と痛みを思い、心が震わせられています。

### 2.

今、このような時に、また「ニュースレター」をお届けすることに、どんな意味があるのか。考えさせられました。

私たちのニュースレターは、被災地の今を伝え、被災地で励む方々を全国の方々とつなぐことを目指しています。私たちは「支援者を支援する」団体である。これが、東北ヘルプの最初からの使命でした。ニュースレターを発行し、あるいは、被災地を訪れる人々を接遇する。これは私たちの中心的働きとなります。

他方で、ニュースレターは「募金」を呼びかける工夫でもあります。そして事実、ニュースレターをお届けしたときに賜る献金によって、東北ヘルプは運営を

続け、支援者各位に献金をお届けし、あるいは支援者各位をつなぐ役割を果たして、9年の歳月を過ごしてきました。

今、経済が一気に崩れていく中にあります。そして、多くの方々が不安の中を生きておられる。その時に、これまで通り、ニュースレターをお届けする意味が、あるのだろうか——考えながら、悩みながら、制作を続けました。連日、新しいニュースが届き、その意味を確認しながら、本号に掲載されたインタビューを続けました。するとそこに、いま目の前に展開してる困難の「9年後」の姿が、ぼんやりと見えてきたように思いました。

### 3.

今号は、津波被災地で故郷を築き直そうとする方と、その働きに寄り添ってきた宣教師の言葉が前半を占めています。そこには、すべてが破壊された後にもなお、私たちには「できること」があるのだというメッセージがあります。

今号の後半には、二つの「お母さん」グループの働きが紹介されます。原発の爆発事故であれ、感染症の爆発的拡大であれ、大きな災害の中では、子どもたちが「無辜の犠牲」となっていくように思われます。その切なさ・悲しさの中で立ち尽くす人々がいます。その働きは小さく見えますが、しかしそれこそが継続し、痛む世界を変えて行く。その実例は、今、私たちを励ますものと思うのです。

迷いの中で、しかし、自信をもって、このニュースレターをお届けします。困難と不安と動揺の中にあるすべての人に、神様の平安と支えと助けが、豊かに豊かにありますように。

2020年3月26日  
東北ヘルプ事務局 川上直哉



## 南三陸町に「恋人岬」を

### 佐藤良夫さんインタビュー



#### 自己紹介

南三陸町の志津川という地区の荒砥（あらと）という場所で生まれました。志津川高校を出て、自衛隊に入るまで、この地で育ちました。宮城県で航空自衛隊に入隊し、輸送などの任務にあたりました。今から 30 年前、「定年後に生まれ故郷に戻ろう」と思い、志津川の高台である旭ヶ丘地区に家を建てて終の棲家とし、そこから矢本の基地

へ一時間の道のりを通勤して過ごし、そして定年退職したのです。

#### 故郷に帰ること

自衛隊員として全国を回っているあいだ、いつも、故郷を思っていました。遠いところでは、硫黄島にも住んだことがあります。全国を転勤して回り、海を見る、山を見る。そのたびに、望郷の念に駆られたものでした。あ、あれは故郷のあの山に似ている・・・と。

被災前の志津川の事を思い出します。田舎町特有の特徴が色濃い場所でした。住人同士の絆が深い。他者を受け入れない雰囲気も、そこにあります。震災前の頃、町は商店も閉まっていた、さみしくなっていました。それでも、それを懐かしい街並みと思っていました。それが、津波ですべて流されてしまったわけです。



## 震災の時

震災当日、駅前のスーパーで買い物をしていました。初めての大きさの地震だ、と思いました。お店の中のお母さんたちが、奇声を挙げて飛び出すのを見ました。中に取り残された自分は、自衛官上がりですから、まず買い物カゴで頭を守り、ゆっくり外へ出ました。大きな揺れがあって、立ってられない。揺れが収まって、情報を収集しようと車に乗って、ラジオをつけたら、大津波警報が聞こえてきました。後に有名になった遠藤美紀さんが、大津波警報を知らせていました。それを聴いて、60年前のチリ地震津波を思い出しながら、自宅へ戻ったのでした。

妻はパートに行っていました。職場は海岸近くでした。心配しましたが、無事に帰ってきてくれました。外で「津波がきた」という声が聞こえてきました。国道398号線を見下ろすことができるコミュニティセンターへ、すぐ向かいました。引き潮がすごい音を立てて家屋を破壊していました。「これは大変なことになった」と思いました。

今、森を切って整地をして復興住宅が建っています。でもその場所はずもと山でした。そこを上って、高いところから下を見ました。老人ホームの人々がそこに上がってきました。その人たちを高校へ避難させる手伝いをしました。その人たちの老人ホームにまで、津波の水が来ていました。そして、町が無くなっていました。

地区の防犯会長として、すぐ、避難された方を受け入れる準備をしました。本当にすぐ、受け入れが始まりました。団地のお母さんたちも集まってきました。そうした人々からの提供を受けて、毛布や衣類が集まり、防犯婦人クラブが炊き出しをする、という流れになりました。本当に、各家庭から供出があり、食事・着替えが提供できたのは、幸いでした。

他方、高校に避難した人々には「何もない」という苦しい声が聞こえてきました。それで、私たちの所にあるものを届けようと、おにぎりを作り、山越えをして、避難所となった高校へ行きました。

とにかく、ラジオを暗闇の中で聞いていました。「1万人以上が行方不明」「海上は多数の死体」と、放送していたのを覚えています。実際にはそれほど人数ではなかったようですが、しかし、その時は「そうなのか」と思い「自分たちだけが生き残ったのか」と、不安になったのでした。

## 避難所で

当時、私たちが住んでいる行政区の区長は、役場職員でもありました。区長として、どうしたらよいか、迷いがあつたように見えました。「自衛隊は、災害派遣で、すぐ来る。それでも、到着に3日くらいかかる。炊き出しが開始されるまでにはさらに、1週間ほどかかる。だから、今のうちに飲み水の確保をすべきだ」と、私は助言しました。区長はその助言を受けて決断してくれました。

避難所に、水を備蓄するためのポリ容器はありませんでした。家庭にあるペットボトルを集めました。隣の地区から井戸水も分けてもらうことができました。みんなで、朝昼晩と、水とを取りに行き、各家庭に配布して、三日四日が経ちました。そうして備蓄が無くなってきた頃、自衛隊が炊き出しを始めたのでした。

私は物資の担当者になりました。おにぎりを作って、各家庭に分ける。そんな日がずっと続いていました。そうして3月も後半になったころ、中澤先生と出会ったのです。「必要なものはありますか」と言うので、「私たちの所には津波が来ていません。被災していないから大丈夫」というと「いいえ、みんな同じです」と言って下さって、支援してくださいました。本当にありがたく思いました。そして、そこから、いろいろな教会の方と出会ってきました。今でも、感謝しています。

## 支援者・中澤竜生 宣教師との対話

中澤：

津波が到達しなかった旭ヶ丘地区でした。それで「家が残った」ということで、逆に、だいぶん苦勞があったのですよね。

佐藤：

はい。私たちの旭ヶ丘地区の住民は500人・200世帯という規模です。そこに、実に1000人くらいが、一斉に避難していたのが、発災直後の状況でした。一番困ったのは「物資を平等に分ける」という支援物資配給の原則でした。そんなことは、とても難しかったのです。数をそろえたものしか、もらえない。そんなことに、とても苦勞した気がします。

それでみんなで考えました。たとえば、私たちがやり取りをしていた志津川高校の避難所は、「数がそろわないから分けない」ということを、しなかった。地区ごとの責任者を決めて、きめ細かく対応していた。それは、本当に助かりました。でも、そうできなかった避難所もあったのです。

中澤：

志津川高校の避難所の皆さんは、お互いに助け合う精神を持っていた、ということですね。そして、少し離れたところにある他所の集落にも、物資を分かち合うようにしていましたね。

佐藤：

それからずいぶん時間が建ちました。復興計画を立てる中で、いろいろなことを思わされました。総じて、どこかで決められた計画の、その結論だけを伝えられた、という気がしています。そんな中で、「伝承館」が建設されることになりました。そこに震災の記憶をとどめる、という施設です。その中身は、私たちみんなが、一緒に作っていません。観光目的だけではなくて、震災を長く後世に

伝えるような施設を作って、みんなに見てもらいたい。もちろん、その施設の半分は観光目的にもなる。そんな施設も、出来上がりつつあります。

中澤：

南三陸町は、やはり、良いところですね。この海が、やっぱり、魅力でしょうか。

佐藤：

はい。この海は汚染されていなく、風光明媚です。他よりもきれいだと思います。私は全国を見てきたけれど、やっぱり、この海の美しさは、トップクラスだと思うのです。

でも、震災前は、牡蠣などの養殖の影響が強く出ていて、必ずしもきれいではなかった。それが、震災後、養殖も4割方、減った。それで、水がきれいになって、牡蠣も出荷までの時間が短くなったのです。そして値段も高くなった。結局、出荷量を減らして、付加価値を上げた、ということになりました。そして嬉しいことに、最近では全国の品評会で賞をとるようになりました。世界的な評価も得ています。震災前とは違う海の魅力が、震災の後、生まれたと言えるでしょう。

中澤：

そんな中で、佐藤さんは新しい観光名所を生み出そうとしていますね。

佐藤：

はい。このそばにある海岸は、昔、海水浴場でした。岸まで砂浜で、たくさんの人が集まっています。そしてそのそばに立つ民宿の私有地として「明神岬」がありました。町がそこを借りて公園として整備して、海で遊び疲れた人が海を眺めて涼を楽しむ場所となっていました。もう半世紀以上も昔の、私たちの学生時代の楽しい思い出です。

いつしか、そこが漁港に変わりました。公園も

忘れられていた。そして今から 20 年前、もう少し離れたところに人工海水浴場が整備されました。そしてそこは、震災後、使えなくなったのです。

今から 3 年前の事です。ここに来て、思い出したのです。「明神岬」を。仲間と昔話が盛り上がりました。そして荒れ果てた岬を見て、その先へ、分け入って見た。昔のあずまやが残っていました。驚いて、うれしくなって、仲間とそのことを話し合い「また公園として整備してほしい」と役場に相談してみました。でも、そこに公園があったという記録もなくなってしまっていました。それで、役場からは「つれない回答」を頂くことになりました。それで、仲間 3 人で話し合い「自分たちで公園を作ろう！」と決めたのです。この公園は、私たちの学生時代、恋人たちの休む場所になっていました。だから、この公園の名前は「恋人岬」にしようと、最初から私は考えていました。

**中澤：**

すごいですね。それからどうなりましたか？

**佐藤：**

もう、勢いで始めた、という感じです。ですから、やろうとしても、最初は全然進まない。

でも、南三陸町の観光名所と呼ばれる場所の多くが流出してしまいました。だから何とかしたいと頑張っていましたら、宮城の県紙『河北新報』の記者さんが取材に来てくれて、新聞に載せてくれました。町の観光協会がそれを見て、全国のボランティアをそこにつなげてくれました。そして大企業の皆さんがバスでどんどん来るようになりました。道具もない。となれば、道具も持参で来て下さるのです。4 年前の 9 月頃、遂に初めて、海が見えるようにと灌木を切り倒す作業が始まりました。3 年前、残った切り株を、掘り起こしました。歩けるように平らになったら、次は記念になるものを建てようという動きになっています。

そうした動きを見ていた埼玉県のある企業が、寄付を申し出てくださいました。それに励まされ、工事をはじめて、2 年前の 7 月 27 日に完成したのが「幸せの鐘」というモニュメントです。除幕式も盛大に行うことができました。県の観光課もパンフレットを作るということで、名所のひとつとして、写真を撮っていました。ジャニーズ事務所さんも協力してくださり、全国に「恋人岬」を紹介してくれました。それで、今でも全国から「Hey! Say! JUMP」のファンの方々がお越しになりました。

そんな風に、行政の手の届かないところで町興しを進めていったという自負があります。今年度も大学生などのボランティアが、たくさん来て、看板を作り、植樹をしてくれました。今でもたくさん「ボランティアに行きます」というお声を頂きます。冬の時期は作業もないので、断っているけれど、草刈りが、これから忙しくなってきます。

階段の整備、芝の手入れ、等、全国の支援が積みあがってきた。今、「あずまや」の修理への募金をお願いしています。このあずまやは、半世紀も昔に作られたものが残っていたのです。それを残す形で、修繕したいと思っています。



半世紀前から残っていた「あずまや」



中澤：

最後に、この町を引き継ぐ次の世代について、お話しくさいますか？

佐藤：

私自身が自衛隊に入った、そのいきさつを思い出します。60年前のチリ地震津波で町の7割が壊滅したことがありました。その時、駆け付けてくれた自衛隊の復旧作業を見て、中学生だった自分は「自分も！」と思った。「人のために何かしたい」と。

2011年の事です。自分の孫たちに、被災現場を見せました。一番下の孫が、何も言わず、付き合ってくれました。そして家に帰ってから「大きくなったら、消防員になる」と言った。

「皆のために何かしたい」と。私は「どっきり」しました。そして、自分の中学生時代を思い出したのでした。

今、その子は、消防学校へ進み、その夢を実現しようとしています。

震災で大切な人・ものを失ったけれど、新しい出会いもあった。今でも、そのつながりは広がっている。この場所ではなく、ここにいる人に会いに来る。「ただいま」と、やってくる。そんな素敵なことが、ここで起こっています。本当に、うれしく思います。

(了)

※南三陸町の「恋人岬」を整備するために、募金を賜れば幸いです。振込票の「恋人岬整備指定」という欄にチェックをつけてご送金下されば、全額、東北ヘルプから佐藤さんに募金をお渡しいたします。ご検討賜れば幸いです。(2020年3月15日 事務局長記)



## 被災地・南三陸町で支援を展開すること

東北ヘルプの働きは、「被災地を支援する人を支援する」ものです。そしてその働きは、キリスト教と教会に基盤を置いています。

キリスト者（クリスチャン）として、教会に支えられながら、被災地で息長く支援する。それはどのような活動となるのか。現場で支援活動を展開するキリスト者たちが、手探りで試行錯誤を続けています。そして、その手探りの成果を分かち合い話し合う会議が、いくつも継続されています。

東北ヘルプ理事でもある中澤竜生先生（基督聖協団仙台宣教センター 宣教師）が、「実践宣証会議」という話し合いを主宰し、継続されています。今回、南三陸町で展開されてきたこれまでの活動を振り返る講演を、この会議で中澤先生がなされました。その様子を以下にご紹介します。この前に掲載しています「南三陸町に『恋人岬』を：佐藤良夫さんインタビュー」と併せて、ご高覧賜れば幸いです

（2020年3月15日 事務局長記）



中澤竜生 宣教師

### 私たちの現場

この絵をまず見てください。これは、何の絵でしょう。——これは宮城県の北東部の地図を切り取ったものです。北から、気仙沼、本吉、南三陸町、そして大きい登米市。私たちは、この四つの場所で活動をしていますね。こうした地図を見ながら、実際に地図に手を置いて神様の祝福を祈ることも、大切だと思っています。

震災後、私はずっと、この地図に人口を書いて活動してきました。今、登米市は、78,000人くらいとなりました。気仙沼全体では61,000人くらい。その中に含まれる本吉は、9,654名。南三陸町は、11,000人くらい。どこも、人口は減っています。震災当時、南三陸町は17,000人いたのです。亡くなられた方もいるし、移住された方もいる。



今日はまず、何故このネットワークが立ち上がったかを、お話ししたいと思いました。私たちは、先に大友先生が出された本から、地元根差す牧会ということ学びました。まさにそうしたことに学びながら、日本人にどうやって、福音・グッドニュースを伝えていくかを考えていくために、このネットワークが立ち上がったのでした。そこから展開して、今日は、具体的に、南三陸町を考えたいのです。

南三陸町という場所は、他所の宗教を受け入れない。もしくは、立ち入ることすら許さない、という地域だったのです。もしそこに他の宗教があっ

## 迷惑な支援者たちと「宣教」

---

震災後、支援に来た人々の中で「基督教の宣教活動をしよう」という人が出て、問題となったことが多くありました。ある支援者が、「聖書勉強をしましょう」と、被災者に言った。「はい」応えると、毎日夜9時に電話がかかってくるようになる。当然、それは被災者につらくなる。どうしたらよいだろう」と、私に相談が来る。「断ってはどうかでしょう」と伝えるけれど、「断る勇気がない」ということで、その人は、どうなったか。その人は、夜9時に、仮設住宅から、いなくなる、留守にする——ということになりました。

「夜9時」です。当然、それを見た周囲の人が怒り始める。「どんな人が、そんな迷惑をかけているんだ」というと「基督教の人だ」となる。「キ

たとしたたら、「村八分」とされた。「村八分」というのは、生活を邪魔する、いじめる、ということではないのです。ただ「そういう人」には忙しい時にだけお手伝いを頂く、それ以外の時は「相手にしない」という感じになる。それが、もともとの「南三陸町」という場所でした。

今、「ワカメを届けてくださる」ような関係が、私たち牧師・宣教師と地域の人々の間に生まれ、継続しています。そうした中に、私は「関係の深化が進んでいる」と言っただけよい状況を見ることができると思います。

基督教の人、だったら、中澤さんだ」ということで、私に連絡が入る。「中澤さん、困っているんだけど」となってしまっ、相談をお受けすることになります。それで結局、残念なことに「宗教の働きは、しないようにしましょう」ということになって、すべての仮設住宅集会場を回って、僕が「ここでは布教は禁止です」と張り紙をする。そんなことが、何度も続く。

この被災地で、私たちが活動するということはどういうことなのか。そのこと自体が問われています。そして、こうした古くからある共同体の中ではどこでも、同じことが問われると思います。それで、会議を開いて、まずそこから考えなければならぬと思ったのでした。

## 「宣証」という新しい言葉

---

いったい、みんな、「宣教」って、どう考えているんだろう。そんなことを考えるようになりました。一般に、「キリスト者(クリスチャン)の働き」を「宣教」と一口で言っている。でも、皆、同じ言葉違うことを考えているんじゃないか。そう考えたので、私は「宣教」という言葉を使わないで、新しく「宣証」という言葉を使うようにしたのでした。

つまり、クリスチャンとはどういう働きをするのか、ということを経験者の皆さんに混乱なく伝えるように、新しい言葉を作ったのです。そして、できれば支援者であるクリスチャンにその「新しい言葉」を共有していただくように、努力してきました。そうした努力は、この私たちの話し合いの中で展開したのでした。

私は、2011年に南三陸町の中心にある志津川という場所にセンターを与えられて拠点とし、53箇所 of 仮設住宅と信頼関係を作って、そこから各種団体につないで支援を展開しました。その際、「福音を伝えたい」という自分たちの思いをばかり優先して、相手との関係を作ることをおろそかにする方も、多くおられました。そういう場合には、協力しないことにしました。関係を作ることをおろそかにすることは、支援もダメにする。そう思いました。

実際、『宣教』とは何か」ということを語りだすと、みんな、違う言葉を語りだすと思います。その

中身を共有していないのに、同じ言葉を使っている。それで、混乱が起こる。20212年の被災地では、まさにそういう混乱が起こっていました。その混乱を回避するために、話し合う場所を必要としていたのです。それで、宮城教会の大原先生にお願いして、話し合うための場所を作っていたのでした。

最初は、たくさんの団体がいて、意見が合う、という状況ではありませんでした。でも、今まで私たちはこうして、心を合わせて話し合い、新しい言葉を探してきたわけです。

## 被災後の南三陸町と「生活支援員」と「集会場」

南三陸町には「LSA」と呼ばれる生活支援員が働いておられます。その様子を調べた論文（本間照雄「被災住民が担い手になった生活支援員（LSA）とコミュニティづくり——宮城県南三陸町被災者支援の事例から——」『社会学年報』No.47、2018年）があります。それを読むと、南三陸町の事情が分かります。

その中の「従来のコミュニティづくり」というところを読みますと、興味深いことが書かれています。それによりますと、この地域には「自治会」はなかったそうです。町が区画を仕切って作った「行政区」と「地区公民館」がある。その二つが行事を企画して実行する。それはあえて重複して行われる。そして、それが地域の共同体を形成していた。地区公民館を拠点とした行政区の活動が、地域共同体の活動となった。そのように書いてあります。

つまり、南三陸町では、集会場が、地域の具体的な活動の中心なのです。そこに、老人会とか、婦人会などがあり、そして、祭儀・祭りもある。それらのほとんどは「契約講」という単位で動いていた。こうして組み立てられるコミュニティを大切にしているのがこの地域なのです。

この「契約講」が、江戸時代、キリシタンを見張る役割も果たしていた、と伝えられています。今でも、コミュニティで「山」を持っています。そしてその森を切って材木として「長男のために家を建てる」ということをする。そうして「自分たちの地域の長男を地元で根付かせる」ということが、あったのです。こうした「契約講」が、津波で流さ



論文は下記の URL で読むことができます。

[https://www.jstage.jst.go.jp/article/tss/47/0/47\\_25/\\_pdf/-char/ja](https://www.jstage.jst.go.jp/article/tss/47/0/47_25/_pdf/-char/ja)

れ、稼働しなくなった。バラバラになって、不安になって、知らない人間と新しいコミュニティーを作る。そういうことが、今、重たい課題となっています。もともと、互いに助け合う共同体だった。それがバラバラになったわけです。

「契約講」は、みんなでお金を出し合う組織でもありました。助け合いの具体的な動きがそこにあったのです。そういうものが震災前まで残っていたのに、津波でみんな、無くなった。そういう現実を支えるために、生活支援員の働きが生まれました。そんなことが、論文の「災害公営住宅のコミュニティーづくり」というところに書いてあります。「契約講」を再び作ることはあきらめて、「自治会」を作るということを始めたのです。

そして、もめた。

やって見ましたら「ひとりの人をリーダーとして動かす」ということが難しい、ということがはっきりしてきました。組織化することによって、問題が起こってくる。そこで、生活支援員が間に入るようになったのです。自治会長さんを支え、住民を支える。その姿は、私たち支援者のモデルになると思います。

## キリスト者として・支援者として

私は、震災直後、旧約聖書の詩篇16編にある「はかり縄はこの地に落ちた」という言葉を、自分のものとして与えられたように感じました。

当時も今も、私は仙台に住んでいます。南三陸町へ通うのは、とても大変でしたし、大変です。特にあの頃は道路が悪くて、片道で3時間、往復で6時間かかる。毎日、その往復が続く。それが半年くらい、休みなく続く。そして、その背後で、大量の支援者・支援物資がやってくるのを整理しなければならない。このままでは体がもたないし、疲れ果ててしまうと思いました。実際、休みがなかったのです。その時に、この聖書の言葉が自分に

そうして、4年たちました。

今、はっきりとわかります。生活支援員さんが支えながら、新しい共同体を作るにあたって、「集会場」が鍵になったのです。南三陸町は、本当にこまめに、集会場を立てました。そうしないとうまくいかなかったからです。そこは「みんなの集会場」となりました。そこで話し合うことがとても大事。そこに混ざらない人は、相手にされない。そういう習慣が、はっきりと、そこに現れたのです。

その習慣がどこからきているか。今振り返って見れば、「契約講」という仕組みの中に、すでにそれはあったのです。そして、その中には、宗教も入っていたのです。南三陸町のホームページには、「神々の祭り」というコーナーがあります。本当に、この街には、いっぱいお祭りがあったのです。一か月に一回は、祭りがあるのではないか。それが「南三陸町」を構成している。そうした中へ、私たちキリスト者の支援者が入っていった。そういう全体像が見えないと、私たちの支援はむなしなものになるかもしれません。

与えられたと感じたのです。

「もしそうだったら、ここに教会を建ててはどうだろう」と、2011年の夏の終わりに、私は考えたのです。南三陸町を構成するすべての地域に一つずつ、教会を建てたいと。

しかし、その考えは、ほどなく、変わりました。

最初、一か所、クリスチャンセンターを建てることができました。するとすぐ、問題が続出したのです。被災者から怒鳴られる、ということも続出した。落ち込みました。



それでも、関係が大事だと思って続けたのです。そこで気づいたのは、地域の人たちは、私たちのしていることを全部、知っている、ということでした。一日もあれば、私たちのしたすべてのことが、触れ回られている。みんな知っている。みんなそれをしゃべっている。「あ、こういう町なんだ」と、気が付きました。仙台とは全く違った。「車の運転で、一時停止を守らなかった」ということが「あそのセンターの若者は運転も知らない」という評判になって、津々浦々に広まる。そして、注意される。

驚きました。いい話は、なかなか広まらなかったのですが、悪い話は「あっ」という間に広まる。

それから、ある方によく言われました。「あ、あの人は、うちの親戚です」「あ、あれは同期です」——あ、こういう町なんだ。そういう1万人が、この町を作っている。

そして、その町の中で、センターを喜ぶ人と、そうでない人の対立が生まれる。センターを使える人と、使えない人で、対立する。それが子どもにも広がって、小学校で、対立する。「センターは、だれが来てもいい」と私たちは言うのに「家を失っていない子どもは来てはいけない」という話になって広まっていました。それで「来るな」と言われた子どもが泣いて先生に訴えたのでした。そんなことは、私たちは言っていないのに。

そういう中で、センターを持っていたら、僕がもたない、と思いました。それで、センターを手放したのです。「乗っ取られたのか」とも言われましたが、違うのです。「手放した」のです。

そして、手放して、心が空洞化しました。

その時、今まで行っていなかった地域から呼ばれて、活動を始めました。そしたら、今までの活動場所から、「あっちばかり行っている」と問題視されました。それでも、活動を続けました。そうしたら、「集会場を使っていいよ」と言ってもらえるようになった。そしてその信用が次の信用を呼んだのです。つまり、あちこちの集会場を使えるようになったのです。

「集会場を使える」というのは、とても大切なことでした。そこでこそ、地域の大切な働きはすべて、行われるからです。だから、この集会場でやるということは、認められている、ということになります。

そして、そこから牧師の働きは始まります。地域の人々の信用を得ながら、聖書の言葉を個人個人に勧め、神様の愛を伝えていくのです。今、そうした働きは、お一人お一人への具体的な支援活動を伴って、今も展開しています。それは多くの方々への支援の賜物です。心から感謝しています。



「実践宣証会議」の様子(中澤宣教師撮影)

会場となる宮城教会の大原牧師が、おいしい昼食を作って下さり、会議はいつも和やかに展開しています。

# 良いことは、かたつむりの速さで

## インタビュー：岩沼での放射能減災の取り組み

2011年3月15日に爆発した福島第一原子力発電所は、巨大な量の放射性物質を放出しました。放出された放射性物質は、県境を越えて宮城県にも広がりました。その現実は大衆メディアによって拡散されることは、あまり、ありませんでした。しかし、自分の子どもを守ろうとする親心は、子どもを被ばくさせた、ということから来る不安と向き合い、「できること」を探して多くの人を動かしました。そうして静かに息長い活動を続けている団体が、宮城県岩沼市（仙台空港のある場所）に、あります。「かたつむりの会」とおっしゃいます。その中心を担われるお二人に、お話を伺いました。

(2020年3月17日 事務局長記)

### 神所美穂さん：

2011年3月の時は、宮城県岩沼市で被災しました。その後すぐ、嶋原さんと知り合いました。お互いに仲間をつなぎ合い、毎週、15人から5人くらいで集まって話し合いをしていました。そして、子どもたちを守るため、様々なことを学校に申し入れ続けていました。

その年の12月に鹿児島へ、親の介護のために帰ることになりましたので、原発事故の影響を考えて、子どもも連れて行きました。そしてそのまま2年半、鹿児島で過ごしました。

鹿児島に行きました後すぐ、横山富美子さんという鹿児島の開業医と知り合うことになったのが、この活動を始めるきっかけになります。横山先生は原発事故の影響を受けた地域に問題意識を向けられて、疫学調査を開始していました。具体的には、甲状腺エコー検査と血液検査をしようと、携帯用甲状腺検査機を用意して、準備を進めておられたのです。

私と同様に、原発事故の影響を考慮して、岩沼市から鹿児島に避難していた人がおられました。その人の繋がりの中で、私も横山先生に協力をする、という流れで、この活動が始まったのです。

### 嶋原敦子さん：

2012年9月、横山医師が岩沼までお越しになって、初めての検診をすることができました。血液と甲状腺検査が、その内容でした。最初、検診の場所が見つかりませんでした。それで「喫茶店でもいいからできないか」と思って話し合っていたら、その喫茶店の店主がある開業医に掛け合ってくれて、場所を借りることができました。

検査には、母親たちが口コミで伝え、子どもたちが殺到しました。50人くらい、集まった。それで「続けましょう」となり、2013年は毎月開催し、毎回70人くらい、検査をお受けになりました。

私たちの会は「かたつむりの会」と名乗りました。小さい存在なのだけれど、できることをコツコツとやる。答えが見えない、正解がない、だけど、できることをやって、子どもたちを守る。のんびり、急がずに。

後からガンジーが「良いことは、かたつむりの速さで」と言っていたことを知って、あ、これはいい名前だったんだと思ったのです。

2012年に始めたその最初から、横山医師は、二日かかりで、来てくれました。鹿児島ではショートステイを管理していたので、スケジュール管理は難しかったのに、本当にありがたいことでした。検査のための諸経費も、実際、今でも横山先生に

大きくご負担を頂いています。2014年までは、横山先生が宮城まで来てくださっていました。でも今は、地元で協力して下さる先生が見つかり、宮城までお越しいただくというご負担をおかけすることは無くなっています。

2015年くらいになると、開催は隔月になり、スタッフも、参加者も減りました。そして、2019年から年4回としました。だんだんと、規模は縮小しているのだと思います。

会としては、代表を置かずに、世話人を置いて、7人から12人くらいのチームで、緩やかに責任分担をして、メーリングリストで連絡を取りながら、運営しています。

検査をするための勉強会もしています。たくさんの方の甲状腺検査を行いました。「東北教区放射能問題支援対策室 いずみ」と同じように、「B」や「C」判定など、甲状腺の特別な異常は、この検査の中では出ていません。ただ「A2」の割合は「いずみ」と、大体同じかな、と思っています。血液検査も、特にその腫瘍マーカーの検査も、特別な事例に出会ってはいません。それで、2017年頃、血液検査は新規受付を締め切りました。そうして、縮小しながらでも、会の活動は、まだまだ続いています。それは「緩やかに」やっている結果だと思っています。そして、甲状腺検査に、今でも毎回30から50人がおいでになります。宮城県南の各地から、遠い方では、山形への避難者や福島県内の方も、お越しになるのです。

参加される方々の名簿は作っています。そして、地区担当を決めて、連絡を回しています。そうしてつながった緩やかなネットワークは、年に一度集まる、ということもなく、それでも維持されています。運営のためのお金は、カンパ箱を置いているだけです。会計係を担当して下さる方はいます。そのカンパで、勉強会や講演会を開催します。

備品（ティッシュ）や子どもへのお菓子などが、その支出項目になります。

#### 神所美穂さん：

この先については、先を考えずに、続けていきたいと思っています。今は、危機感を風化させず、避難できる人の避難の途を残したいと願っています。そうして、継続して様子を見守っている、と言うつもりで続けています。ですから、この活動は「止められない」という感じです。検査を続けても、何か具体的な「成果」が数字になって出るかどうか。それはわからないと思っています。でも、あれほどの事故と、そしてその子どもたちへの影響は、あつたのです。無かったことにはできない。定期的に調べて、何か出たときの備えをする。そう思っています。

#### 嶋原敦子さん：

次は6月に予定しています。一応、年四回、季節ごとの第二日曜日が、定例の検診日です。淡々と、とにかく検診を続けたいと願っています。広報などをして展開すると、「いろいろ」なことが活動に入ってきて、目的がぼやけます。なのであえて積極的な広報はしてきておりません。ですから、チラシも作っていません。そうしているから、とにかく続けてこれているとも思うのです。



2020年3月11日、東北ヘルプ事務局にてインタビューしました。

※同封した振込票でご指定献金をお送りくださいましたら、その全額を東北ヘルプから「かたつむりの会」の皆様にお渡しします。ご高配を賜れば幸いです。



# 「いわき食品放射能計測所 いのり」の新しい体制

## 「TEAM ママベク」インタビュー

日本基督教団常磐教会内に設置され運営を続けている「いわき食品放射能計測所 いのり」は、2020年4月から新しい体制に移行します。震災直後から、いわき市内の子どもたちを守るために活動してきた「TEAM ママベク」との協働を開始します。具体的には、計測のボランティアを「ママベク」の皆様にお願ひし、他方で、計測所とその事務機能を担う東北ヘルプが「ママベク」の活動をサポートします。

既にこれまで、「ママベク」の皆様は計測所を活用して様々な活動を展開して下さいました。新年度から、そのつながりを更に展開できますことを、東北ヘルプとしても心から嬉しく感謝に思っています。

今回、「ママベク」の中心を担っておられるお二人に、東北ヘルプ事務局長がインタビューをさせていただきました。それは、今起きている感染症の混乱の中で、「その後」を見据えるためにも、多くの示唆を与えるものとなっていると思ひました。

震災直後から続く息長い経験の、豊かな実り。どうぞ、ご高覧下さい。

(2020年3月16日 事務局長記)

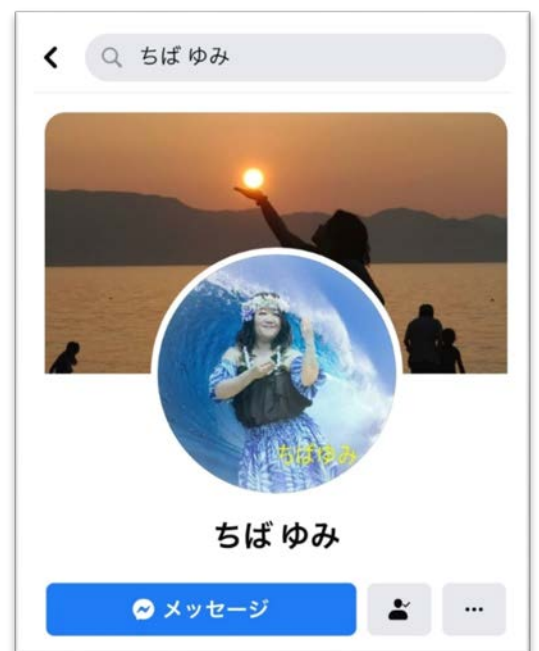
### 【自己紹介】

——震災があった時、どこで何をしていましたか？

#### 千葉由美さん：

震災の時はいわき市にいましたので、とりあえずすぐ、福島市の実家に避難しました。でも、実家では、内部被ばく防護ができないと思ひました。福島市の汚染状況は、深刻だったからです。「子どもは結局、自分でしか守れない」。そう思ひました。そして、2011年4月10日にいわき市に戻ったのでした。

その後、子どもたちを学校には行かせずにいました。その年の5月の連休までは、みんなで家にいたのでした。でも、学校側は例年通りの日程で始業式をやるということになってしまう等、皆、普通に過ごしていました。



千葉由美さんの Facebook プロフィール画面

内田ゆかりさん：

震災の時には、いわきに住んでいました。でも、ちょうど、夫の転勤があって、2011年4月から、福島隣の茨城の土浦市へ行く予定となっていました。それで、ともかく引越しをして、2011年度からは茨城で暮らしていました。

私の実感として、子どもたちに「気になる症状」が複数出ていたことを、よく覚えています。それなのに、まったく情報が入らなかったのが、つらいことでした。それで、仲間を探して、悩みを共有して「しのいだ」という実感です。「自分で情報を集めない何も始まらない」「黙っていたらどうにもならない」と、そう気づいて、諦めずに努力を続けました。

### 【これまでの活動と「行政協議」】

——いわき市のお母さんたちは連帯し、情報を共有して、

たくさんの方が避難した、と聞いていましたが・・・。

千葉さん：

どうでしょう。避難した方は「クラスに一人いるかいなか」くらいではなかったかと思えます。その中で、少数派である自分を確認して、同じ思いの人を探しました。周りを見渡しますと、お母さんたちの不安が一番の問題となっていました。ノイローゼが深刻な問題になっていたのです。その問題に対応するため、そして、子どもたちの被曝防護策を求めるなど、具体的な声をあげるためのコミュニティーづくりをしようと考えました。並行して、5月2日くらいから放射能の測定を始めていました。それで、「放射線量測ります」というチラシを作って配り、自宅で「お茶会」を週一回のペースで始めました。そうして繋がりを作っているうちに被ばく問題が顕在化してきましたので、2013年初めに「いわきの初期被曝を追及するママの会」を立ち上げたのでした。

——なるほど。まず、「放射能計測」と「お茶会」があって、

それから「アドボカシー（社会的弱者の権利擁護活動）」を始めたのですね。

千葉さん：

はい。ただ、「アドボカシー」という言葉を、私たちは、使ってきませんでした。むしろ「いわきの初期被曝を追及するママの会」の活動は「行政協議」と呼んでいます。「異議申立」や「請願」ではなく、「協議」を行政側と行う。そのためには、測定チームを作り、問題を可視化しなければならないと思いました。それで放射能計測をするために「TEAM ママベク 子どもの環境守り隊」という団体を立ち上げました。最初、20人くらいで始まったと思います。今は8人の会となっていますが、今現在実働するのはほぼ私たち2人で、ともかく活動を続けています。

特に、「お茶会」の活動は重要だったと思います。「ママ cafe かもみーる」という名前で活動は続いています。原発事故後一時的に避難していたご家庭も、経済的その他、たくさんの理由から、どうしてもいわき市に戻ってこられる。そうすると、お母さんたちが「うつ状態」になることが多い。そうした方々にカフェに来てもらって、苦しみを分かち合う時を持っていただく。そうしているうちに、放射能から子どもたちを守る方法をみんなで話し合うようになる。そんな「ママ cafe かもみーる」を、月一度、継続しています。

最初は「いわき母笑（ははえみ）ネットワーク」として始めました。2015年から今の名前である「ママ cafe かもみーる」として、会場も日本基督教団常磐教会としました。「母親のハーブ」とも呼ばれるカモミールは、子どもを癒す効果があります。痲癩にも効き、リラックスできます。これは、アトピー性皮膚炎と一緒に生きている私の子のためにと勉強して知りました。

## 【「大人の都合」を乗り越えて】

——この「TEAM ママベク 子どもの環境守り隊」の活動と、常磐教会内に設置されている「いわき食品放射能計測所いのり」とが、2020年4月から協働を開始させていただくことになりました。本当にありがたく思っています。



日本基督教団常磐教会 と いわき食品放射能計測所「いのり」

### 千葉さん：

行政との協議をするためには、測定データを集計し整理することが、とても大切になります。そのために、「いのり」と一緒できることは、私たちにとってもありがたいことだと思っています。

行政協議では、行政のやり方で見つけられなかったホットスポットを報告します。行政機関は国の基準で空間線量を測定しています。それは母親目線からは不十分に見えるのです。

まず何より、土壌の汚染を見てくれません。それから、ホットスポット（局所的に非常に高い放射能汚染が確認される場所）があっても、なかなか除染をしてくれない。除染対



象にもしてもらえなかったりする。さらに、森林などが近くにあると、すでに除染したところも、ほどなくその効果を失う。

ホットスポットが学校の敷地内や通学路などにあった場合、私たちはとても不安に思います。だから、立ち入り禁止にしてほしいと、行政に協議の場を求めます。ほとんどの場合、「校長の権限だから」という理由を立てて、行政は「何もできません」と言います。校長先生はというと、「自分たちの過去の不作為」や「農家への風評被害を呼ぶ」ということで責められることを怖がって、「何もしてくれない」ということになるのです。

全て、大人の目線で議論されてしまうところに、問題があるのだと思います。だから私たちは、その「大人目線」にも耐えられるように、「学校が受け入れやすい看板」をデザインしたり、市の予算の活用を求めたりしました。そうすると、少しだけ、良い反応がありました。

結局、行政には行政の、学校には学校の、それぞれの「大人の都合」があったのです。それを一つずつ話し合い、「子どもたちのために」と、知恵を一緒に絞る。そうすると、事態はゆっくり改善されていきました。そして、学校のホットスポットには全て、看板を立てることができたのでした。その背後では、一軒一軒、教育委員会の方が学校を回ってくれたのでした。それはつまり、行政協議を温和に続けてきた成果だと思います。協議を継続する中で、子どもたちへの被ばくを避けたいという趣旨は、十分に伝わったのだと思います。

——なるほど。「行政協議」を粘り強く行って、子どもを守る。そのために計測作業を行う。そのために、カフェをやって、息長い・ゆるやかなつながりを当事者である「お母さん」たちと保っていく。そうした全体が組みあがって、10年ほどの時間をかけると、成果が上がる。子どもたちを守ることが、少しずつ、進む。すばらしいことだと思います。

### 【つながることが最優先】

千葉さん：

でも、いつも課題だらけです。例えば、今はカフェなどに10人くらい集まって下さいます。でも最初は50人くらい集まったのです。そしてその内容は、「ママベク」の行った放射能測定の報告会だったのです。当時のお母さんたちは情報に飢えていました。でもだんだん、その逆になっていきました。2016年頃から、放射能の情報は敬遠されるようになったのです。「現実逃避」と言われても仕方ないかもしれません。精神的に疲れてしまったのです。それで、どうしても、楽しいことへと傾斜する。私たちも、同じです。

だから今は、正面から「放射能」とか「被ばく」と言うことをやめて、まずは面白いこと、楽しいこと、おいしいことをして、つながりを深めていくようにしています。例えば料理や手仕事など、参加者の興味関心にスポットを当て、マッサージコーナーなども設けて魅力的な会になるよう、工夫を凝らしています。

そうして信頼関係ができれば、あるいは個人的につながっていけば、「不安」はみんな共有しているから、「本当の話」ができるようになるのです。

長くやってみて、わかったことがあります。それは、「つながることが優先」ということでした。

——そうですね。よくわかります。「つながることが、優先」。行政担当者とも、粘り強く協議して、相手の立場を理解して行くことで、信頼関係ができて、つながりだって生まれる。本当にそうですね。そうして、つながりの中で、内田さんも「ママベク」の活動の中心を担われるようになりました。

内田さん：

はい。私は、土浦で「ドリームキッズ・ふくしま」という会を立ち上げていました。そこで、情報交換と、甲状腺検査を、仲間とやっていたのです。そうして情報を集めながら過ごしていました。そして、今から5年位前にいわきへ戻ることになりました。「帰る」となってくると、いよいよ放射能への不安が募りました。そんな時、テレビを見ていたら、ママベクさんが出ていた。テレビ局に電話して、連絡を繋いでもらって、ママベクの報告会に出て、そして、いわきへ帰ってきてから、お茶会に参加するようになりました。そこでは驚くほどたくさんのお情報を得て、本当に助かりました。そうしているうちに、私も3年前くらい前から、ママベクの測定作業に加わるようになりました。

### 【動く、ホットスポット】

——テレビに電話をされたのですか。すごい行動力でした。そうして、お二人を中心に、これまで、計測作業をして、情報を整理されてきたわけですね。その中でお気づきになったことはありますか？

千葉さん：

ホットスポットがあるところは、確実に、減ってきています。ただ、ホットスポットは「動く」という困った現実があります。

——動く、のですか。

千葉さん：

はい。いわき市は広い面積を持っています。測定するのは小学校、中学校、保育園、幼稚園。公立はすべて測定しますが、私立は希望があったところのみを測定します。それらを合わせれば、約200か所があり、測定には2年もかかりました。学校関係者と行政の担当課にホットスポットを報告して必要な対策を求め、その後「もう一度」と、同じ場所に行ってみると、ホットスポットの位置が変わっている。たとえば、2年前にはなかった「プ

ランターの土」が子どもたちのいる場所に新しく捨ててあって、そこから「12,750 Bq/kg」の放射能が検出されました

——震災前であれば「指定放射性廃棄物」として、国家による厳重管理となる数値ですね。現在は「緊急事態宣言」下であり、震災前のように騒がれないだけ。

千葉さん：

はい。だから当然、私たちは「どかしてほしい」と思う。でも、「空間線量」は「0・18  $\mu$  Sv/h」となっていました。(国が定める除染基準は毎時 0.23  $\mu$  Sv以上)だから行政は、動かない。でも、言えば、確認をしてくれる。そして話し合う。粘り強く話し合う。そうすると、「景観を損ねる」という理由付けをしてくれて、その土を「どかしてもらえらる」ようになったのでした。

——行政には行政のタテマエがあって、動きにくい。でも、そのタテマエの隙間を縫って、子どもたちのために、みんなで力を合わせる。

千葉さん：

そういうことです。そして、それにはとても時間がかかります。例えば、原発爆発事故のすぐあと、保護者と教師たちはPTAの奉仕作業の中で、自分たちの手作業で「除染」をしました。そうして生まれた土嚢について、行政は「国の除染とは関係ない土嚢は、いわゆる除染作業の対象外だ」という国のタテマエに縛られて、処理してくれない。でも、その土嚢は放射性物質です。だから粘り強く交渉しました。結果、それも「景観を損ねる」という理由をつけて、やってもらえるようになった。そうなるまで、実に2年もかかったのでした。

実際、そうなるまでの努力は、大変なものでした。写真や画像やデータ等、「証拠」を見せないと、どんなに協議の場を持って、行政側が現場感を持ってくれない。結局、イメージを持ってもらう作業が、大変だったと思います。実際、資料作りの作業は、徹夜続きだった。

——コピー用紙やインク代は、どうしたのでしょうか。

千葉さん：

感謝なことに、カンパを頂くことができます。それで、ぎりぎり、やれています。

——計測所、そしてその事務局となっている東北ヘルプが、お役に立てるかもしれません。

## 【追加被ばくをさせない】

——最後に、今一番大事に考えていることを教えてください。

### 千葉さん：

私は三人の子育てをしました。もう、それも終わります。振り返って見ますと、「子どもたちを守るため」の活動のために「子育てを放棄した」という気持ちは、あるのです。さみしい思いをさせたと思う。「せめて」と思って、短期保養にも努力してみましたが、それも2年目くらいまでだったと思います。子どもは、成長して、自分の時間を必要としていきますから。

### 内田さん：

私も、千葉さんと同じ思いを持っています。「子どもたちを置き去りにした」。千葉さんの思い、よくわかります。

### 千葉さん：

そうした中から見えてきていることがたくさんあります。

現実的なこととして、今、福島第一原発から30キロ圏内にある富岡町へ、いわき市の子どもが行って、練習しているのです。その放射線量は、はっきり、高い。私たちは心配します。だから、行政協議の中で話題にしました。すると、「使えることが前提の施設となっているのに、学校側に“行かないでください”とは言えない」という行政のタテマエが出てきます。

帰還困難区域とされた地域については、年間の被ばく限度を「1ミリ Sv」から「20ミリ Sv」に引き上げたのは、国の政策です。その中でタテマエが定まり、「その施設は“使える”」ということになる。でも、本当に、それはいいのか、どうか。

私たちは、子どもたちを「すでに被ばく」させたのです。その私たちは、それでいいのか。

富岡町今を見て、ただ「復興できてよかったね」という歓迎ムードに流されて、それでいいのか。

私たちが「被ばくさせてしまった子どもたち」を、どうやって「追加被ばく」させないか、

それを考えないといけないのではないか。

「大丈夫だ」といって、結局追加被ばくさせているのではないか。

私は、そう、行政の担当者に投げかけたのです。



「逆でしょう」と言った。

立場はわかる。だから、私たちの声を使ってくれと。「うるさい親がいるから」と、学校に言ってくれと。

声を上げる人がいなくなれば、誰も守れないのだ、と思っています。

**内田さん：**

子どもたちのために、これ以上被ばくさせたくない。有難いことに、夫も「無視はできない」という思いをもって、理解してくれている。それを本当にうれしく有難く思っています。

——ありがとうございました。私たちの仲間である「福島県キリスト教連絡会（FCC）放射能問題対策室」の主催する学習会で、「追加被ばく」を避けることが「がん抑止」につながる可能性があることを確認しています。長く持続された貴いお働きに、心からの敬意を表します。改めまして、これから、どうぞ、よろしくお願いいたします。



2020年3月2日、日本基督教団常磐教会内の「いわき食品放射能計測所 いのり」にて、仙台の計測所の計測職員による計測作業の指導が行われました。

※東北ヘルプへの献金用振込票で「ママベク支援指定」とお知らせくださいましたら、ご献金の全額をお送り致します。ご活用下さればまことに幸いに存じます。

# 収 支 計 算 書

NPO法人 被災支援ネットワーク・東北ヘルプ

自 2019年4月1日

至 2020年3月10日

(単位：円)

会費収入	(正会員・協賛会員 合計1件)	10,000
献金収入	(教会・団体・個人 累計435件)	8,282,887
その他収入	(預金利息等)	2
収入計		8,292,889
給料手当	(職員給料)	2,260,000
法定福利費	(社会保険・労働保険)	229,664
新聞図書費	(書籍代)	133,538
通信運搬費	(電話・郵便・運賃)	567,465
支払手数料	(銀行手数料)	74,394
外注費	(税理士・社労士)	527,600
事務費	(文具・消耗品等)	486,818
広告宣伝費	(ニューズレター等)	314,434
旅費交通費	(高速代・JR券代等)	1,407,868
燃料費	(ガソリン代)	242,038
会議費	(会食代・会場代等)	170,394
支援費	(他団体への支援)	1,320,800
支出計		7,735,013
当期損益金額		557,876
前期繰越損益		1,535,307
次期繰越損益		2,093,183

## 事務局より:

●本年度は、昨年度(620件・9,395,309円)と、ほぼ同額の献金を賜る見込です。感謝に堪えません。本当にありがとうございました。

●支出を前年比150万円程度、減少させることができる見通しです。これも、各方面からの多くのご協力を賜りました結果です。感謝深甚に存じます。

●NPO法人の理事会は、「まる10年」は活動を続ける事、つまり、2022年3月までは支援活動を継続しよう、という目標を立てて、進んでおります。この目標は、なんとか達成できるかもしれないという見通しが出てきました。では、その先を、どうすべきか。皆様と一緒に祈りつつ考えてまいります。どうぞ、引き続きご意見をお寄せください。

●献金者ご芳名は、代表挨拶(別紙)の裏面にて、ご報告させていただきます。

(2020年3月26日 事務局長 記)



## 支援金・献金の受付口座

### 【郵便振替】

02290-8-136273

特定非営利活動法人

被災支援ネットワーク・東北ヘルプ

### 【他金融機関からの振込口座】

ゆうちょ銀行 二二九店

当座預金 0136273

発行責任 NPO 法人 被災支援ネットワーク・東北ヘルプ

代表 吉田隆（日本キリスト改革派甲子園教会牧師・神戸改革派神学校校長）

事務局長 川上直哉（日本基督教団石巻栄光教会主任担任教師・

食品放射能計測プロジェクト 共同運営委員会委員長）

理事 田中武司（保守バプテスト同盟西多賀聖書バプテスト教会員・財務担当）

理事 中澤竜生（基督聖協団仙台宣教センター国内宣教師・扶助基金実行委員会委員長）

理事 秋山善久（日本同盟基督教団仙台のぞみ教会牧師・NPO 法人 セミナーレ理事）

理事 阿部頌栄（日本ナザレン教団仙台富沢教会牧師・仙台食品放射能計測所長代行）

理事 木田恵嗣（ミッション東北 郡山キリスト福音教会牧師）

監事 本村大輔（救世軍杉並小隊長）

※肩書等は、すべて2019年7月末日現在

Sendai Christian Alliance Disaster Relief Network

# Touhoku HELP

Per crucem ad lucem（十字架を通過して光へ）

〒980-0012 宮城県仙台市青葉区錦町 1-13-6 食品放射能計測所「いのり」気付 ※住所が、変わりました。

TEL/FAX. 022-263-0520 URL : <http://tohokuhelp.com> MAIL : [sendai@tohokuhelp.com](mailto:sendai@tohokuhelp.com)